

J. M. W. ターナー 《雨、蒸気、速度—グレート・ウェスタン鉄道》における曖昧性の演出と同時代批評への応答

中山修平(慶應義塾大学)

本発表は、J. M. W.ターナー(Joseph Mallord William Turner, 1775-1851)による《雨、蒸気、速度—グレート・ウェスタン鉄道》(1844)(以下《雨、蒸気、速度》)を取り上げ、当該作品を「同時代の批評に対するターナーによる応答」として再解釈することを目的とする。

《雨、蒸気、速度》は鉄道を描いた最初期の絵画として知られ、先行研究においては画家の意図について多様な解釈が為されてきた。しかしそのような解釈の多くは「鉄道や産業革命に対する画家の評価」という枠組みに収まっているように思われる。そこで、本発表では本作における題名及び造形上の特徴に注目し、それらを「批評との関わり」という観点から検討することにより、本作における画家の意図について新たな考察を試みる。

検討に際して、発表者が最初に着目するのは作品の題名における特異な抽象性である。特に風景画において、ターナーが説明的な題名をつける傾向にあることは先行研究において指摘されているが、抽象的な単語が並んでいる本作の題名はむしろ曖昧と言える。また、絵画表現においても、蒸気機関車を取り囲む風景は雨、もしくは蒸気に覆われたかのように不明瞭に描かれている。

実際、当時の批評家は本作の曖昧さに困惑している。例えば『モーニング・ポスト』誌は題名が「謎めいている(enigmatical)」ことに言及し、『スペクテイター』誌は「形態の曖昧さ (the laxity of form)」と「効果の奔放さ(licence of effect)」という表現上の不明瞭さを辛辣に評価している。

このような批評に対するターナーの反応を推測する上で鍵となるのは「不明瞭さは私の欠点だ (Indistinctness is my fault)」という彼自身の言葉である。この言葉は《スタッフア、フィンガルの洞窟》(1832)の売却を巡る 1845 年の手紙の中で、チャールズ・ロバート・レズリー(Charles Robert Leslie, 1794-1859)によって言及されたが、近年の先行研究(Smiles Sam, *The Late Works of J. M. W. Turner The Artist and his Critics*, 2020)は、この発言を批評に対するターナーの皮肉として解釈できる可能性を示している。

以上を踏まえるならば、ターナーはロイヤル・アカデミー展において《雨、蒸気、速度》という題名、及び造形表現を通じて曖昧さを強調した作品を発表することで、保守的な批評家を意図的に挑発したと考える余地が生まれる。本発表では、1844年のアカデミー展に対する批評言説や、ジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)の日記等同時代の記録を主な手掛かりとして、この仮説の妥当性を検証する。